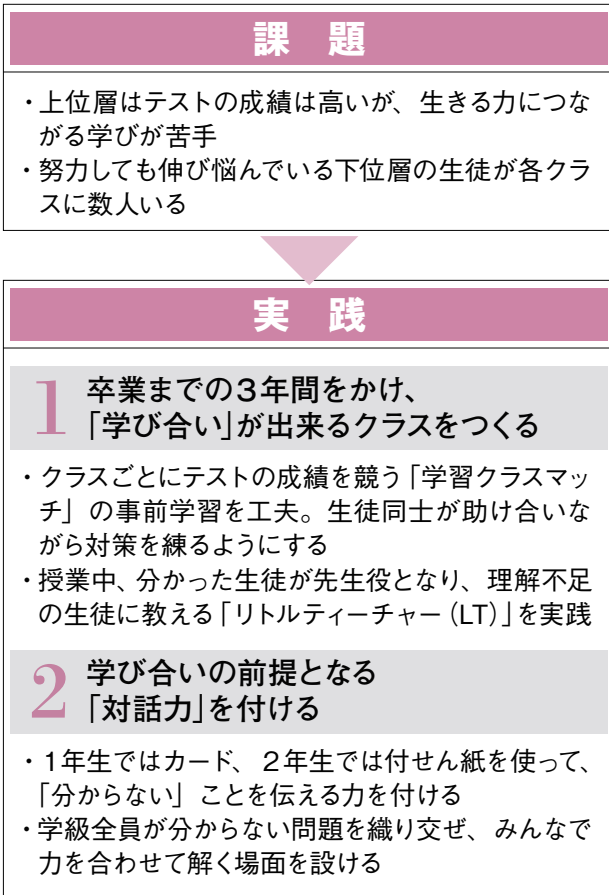


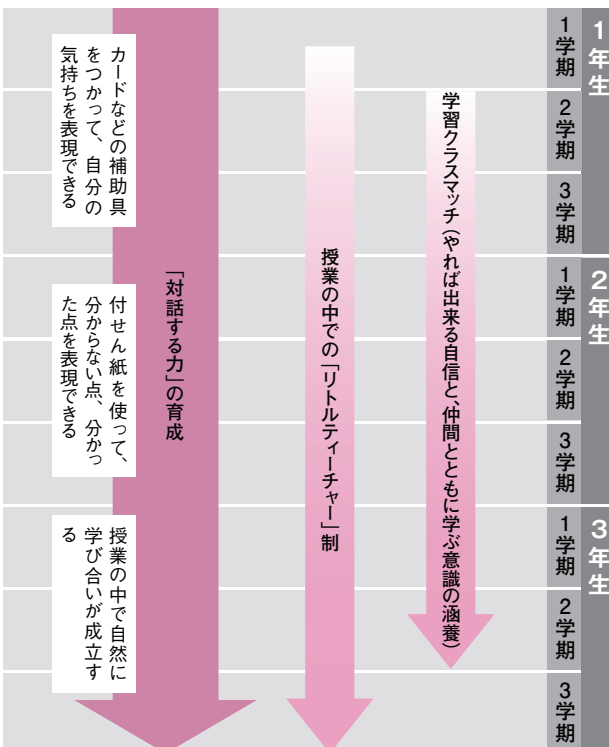
「互いのための学び」で 共に学び共に伸びる生徒を育てる

熊本県 熊本市立白川中学校

熊本市立白川中学校は、自分のためだけの学びではなく、「互いのための学び」を取り入れることで、生徒全体の学習意欲の向上を図ろうとしている。授業で生徒同士が自然と教え合う関係づくりを、3年間かけて目指している。



3年間の指導の流れ



School Data

◎古くから文教地区として栄えてきた熊本市の中心部に位置する。校区内に大学3校(短大も含む)、高校8校、国の合同庁舎や文化施設などがある。2008年度から2年間、熊本市の研究指定を受ける。



校長◎平井智憲先生(2010年4月から)

生徒数◎552人 学級数◎17学級(うち特別支援学級2)

所在地◎〒862-0971 熊本県熊本市大江3-1-12

TEL◎096-364-6181

URL◎<http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/school/j/shirakawa/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

「互いのための学び」で 学習意欲を伸ばす

熊本市立白川中学校は、大学をはじめとする教育機関が集まる熊本市の中心部に位置する。小学校で学力上位層の一部が私立校や大学の付属中学校に進学するが、生徒たちは落ち着いた環境で学んでいる。

しかし、2008年度に熊本市から2年間の研究指定を受けた際に課題を洗い出したところ、そうした同校の生徒も、ある課題を抱えていることが見えてきた。藤本明博校長（当時）は次のように振り返る。

「テストの点数を伸ばそうという意欲のある生徒は多いのですが、生きる活力となるような『学び』に意欲的な生徒はあまりいないように感じました。『数字で見える』学力は一見高いものの、人生の充実感や学ぶ楽しさにまでは、日々の学習が繋がっていないと感じました」

また、平均で見た学力は比較的高いものの、1クラスに5、6人程、努力しても伸び悩んでいる学力下位層の生徒がいるのも気がかりだった。

そこで、同校は、「生徒同士の人間関係を生かすこと」、「互いのための学び」を取り入れることで、生徒集団全体として学力向上を図ろうと試みた。

『「自分のためだけの学習」は、実はあまり

身に付かないのではないのでしょうか。そこで、自分で得た知識や技術を人に伝えたり、逆に人に教わることで疑問が解消したりする場面を取り入れた指導を考えました。他人に喜んでもらったり役に立ったりすることによって、学ぶ楽しさを感じ、更に学びが深まるのだと思います」（藤本校長）

人間関係の構築が 学びの土台となる

代表的な取り組みは、1年生から始まる「学習クラスマッチ」と「リトルティーチャー」だ。「学習クラスマッチ」は、計算問題や漢字の書き取りテストなどの成績をクラス間で競うもの。問題はあらかじめ生徒に示され、クラスごとにグループ学習を取り入れた自主学習を行うことで、「学び合い」の中で基礎学力の定着を図る取り組みだ。

「リトルティーチャー」は、授業中、出来る生徒が理解に苦しんでいる生徒を手助けする場面を意図的に取り入れたシステムだ。まさに「教え合い」を具現化した取り組みで、教科によって先生役の生徒は交替する。ある授業では「教わる」側だった生徒が、別の授業では「教える」側になることが出来るので、自己肯定感の涵養にも結び付く。

研究主任の犬童隆雄先生は、「生徒同士の『教え合い』『学び合い』が成立するために最も重要なのは、人間関係の構築です」という。

「出来ない生徒が『分からない』と素直に言えるようなクラスであることが前提となります。そこで、教え合いと並行して、1年生の時から対話を伸ばす取り組みを重視しています。1年生では授業の理解度をカードで伝える方法を取り入れ、2年生では分からないことを付せん紙に文章として書かせ、徐々に自分の考えや思いをみんなに伝えることが自然に出来るように促します」

この方法で、08年度入学生は1年生の2学期ごろには「分からない」を恥ずかしながらに言い合える関係が出来たという。

「私たちが求めている学習の姿は、学びが『自分だけ』にとどまらず、仲間との関係の中で広がっていく状態です。そういう場面をいかに授業の中に設定できるか。研究主任をはじめ、本校の先生方には頑張ってもらっています。子どもの変化は、このような指導の積み重ねの結果だと思います」（藤本校長）



熊本市立白川中学校校長
藤本明博 Fujimoto Akhiro
熊本市立白川中学校
犬童隆雄 Inoue Takao

研究主任。2学年担任、数学科担当。助け合う場面、教える場面、聞く場面をしっかりと取り入れた授業をつくりたい。

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

1 学級を学びの集団にする「学習クラスマッチ」

■「やれば出来る」を実感させるテスト

「学習クラスマッチ」は、計算問題や漢字の書き取りテストなどを学年ごとに同じ問題で行い、クラス間で平均点を競うというもの。07年度入学の学年が始めた取り組みだったが、08年度の研究指定を機に、月1回を目安に全学年で実施することにした。

出題範囲はあらかじめ示し、練習問題のプリントを用意する。実は、クラスマッチのテストはこの練習問題と全く同じであるため、しっかりと勉強しさえすれば確実に得点できる仕組みになっている。

「生徒に達成感を味わわせ、学習意欲を喚起するため、あえて練習と同じ問題を出して

います。作問の手間が省け、教師の負担が減る利点もあります。また、修学旅行前には沖繩に関する100問を出題しました。生徒は驚くほど意欲的に取り組み、定着率はとても高いものになりました」（犬童先生）

■生徒同士が教え合いながら対策

朝学習の時間などに、クラス全体で対策に取り組むようにしているのも工夫の一つだ。

「昨日はどこまで勉強した?」「どこまで出来た」と、生徒同士が教え合いながら勉強する。こうした過程を踏むことによって、結果が良ければクラスみんなで喜び、悪くても誰かを責めたりすることは無い。「うちのクラスは最下位だったから再テストをしよう」「Aさ

んがこの点数を取れるまで頑張ろう」という発言がよく聞かれるという。

犬童先生は、「担当教科の数学では、放課後に下位層の生徒を集めて補習をしています。その際、『教えてあげられる生徒は集まって』と声を掛けると、必ず数人が集まります」と学び合いの意識が定着していると話す。

もちろん、クラス間での競争には配慮が必要だ。クラスの土台が出来ていない1年生の1学期や、受験勉強に取り組む3年生後半には学習クラスマッチは実施していない。

「あくまでも生徒の実態を見て、『この状態なら大丈夫』と判断して実施時期を決めています」（犬童先生）

2 「リトルティーチャー」で下位層の意欲を高める

■生徒が授業で先生役になる

「リトルティーチャー（LTC）」は、各教科の授業の最後に行く、まとめの時間などを使って、課題をきちんと理解している生徒が、理解に苦しんでいる生徒の先生役となる取り組みだ。

例えば犬童先生は、与えた課題が出来た生

徒から順に採点する場面で、きちんと理解している生徒がいたら「これからAさんが先生役になって教えてくれます」と伝え、その生徒に他の生徒を支援するように促している。

最初は、そうした場面を意図的につくっていったが、やがて生徒が先生役にふさわしい生徒に聞きに行くことが自然に行われるように

なった。

生徒には一人ひとり得意不得意があるので、教科によって先生役の生徒は替わる。例えば、技術科の授業では、英語や数学などの成績は低いですが、パソコンの得意な生徒が先生役になっている。

「リトルティーチャーでは、ある教科で教

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

3 3年間かけて生徒の対話力を育む

えられる立場の生徒でも、別の教科では教える立場になれます。生徒一人ひとりの活躍がみんなに認められる場が出来るのが、大きな特長なのです。『今日は僕がティーチャーだ』と意欲的な生徒の姿をよく見かけられるようになりました」（藤本校長）

■先生役にも理解が深まるメリットが
先生役になる生徒にとっては、理解を更に深める機会にもなる。

「教えてもらう側は、先生役の教え方が分からなければ『説明が分からない』とはつき

■「分からない」を表現できる力を付ける

生徒の教え合い・学び合いが成立する鍵は、3年間を通した「対話力」の育成にある。

「生徒は授業中に分からないことがあっても、教師に質問せず、黙っていることがよくあります。教師は生徒の不明点を把握できず、有効な手立ても無いまま、生徒の成績は更に下がるという悪循環に陥ってしまいます。『恥ずかしい』『笑われるのではないか』と思わずに、自分がどこでつまづいているのかを把握し、きちんと伝えられるようになることが大切だと考えています」（犬童先生）

1年生では、表が黄色、裏が青色のカードを用意し、教師の話に「なるほど」と思った裏返して青、よく理解できなければそのま

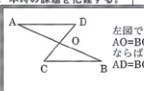
り言い、説明が上手ければ『何を言っているのか良く分かった』と言います。普通、教えてもらう方はあれこれ言いにくいものです。が、生徒同士の関係が良好だからこそ、出来ることなのでしよう。教える側も学びが広がり、双方に『学習した』という充実感が得られるわけです」（犬童先生）

ま黄色の面にさせておく。そして例題を解く時に、班内で黄色のカードのままの生徒に教えるように指示する。

こうした方法に慣れた2年生になると、黄色の付せん紙には分からないこと、逆に分かったことは青色の付せん紙に書き、教科書やノートなど、他の生徒にも見える位置に貼らせる。理解不足の生徒を発見しやすく、また生徒同士が教え合うきっかけにもなる。

「色分けという単純な手法ですが、生徒にとっては自分の考えを整理したり、ほかの人に教えてもらいやすくなりたりするのに役立っています。教師にとっては、『班の中で黄色の子がいたら教えてあげて』と具体的に指示をしやすくなりました」（犬童先生）

図 リトルティーチャー（LT）を取り入れた授業例

学習活動・教師の支援	形態	学習の様子
1. ミニプリント（数トレ）	一斉 ペア	隣同士で答えを確認し、間違っているところを教え合う。
2. 既習の図形の性質の復習をする。	一斉	「定理カード」を利用した復習・確認 列指名でテンポよく
3. 本時の課題を把握する。 	左図で AO=BO, DO=CO ならば AD=BC	穴埋め式の証明にチャレンジ
4. 前時までの証明問題との違いに気づかせ、どうやれば証明できそうかを考えさせる。	一斉	証明を発表してみよう!! 練習問題にチャレンジ
5. 練習問題を解く。 ・個別に採点や支援をしながら、早く終わった生徒には、LTとして、他の生徒への支援活動をするように促す。	一斉 個別 LTの活用	解けたら先生が採点 正解したらLT!! ・証明が正しくかけているかを確認。
6. 練習問題の答え合わせをする。		

二重線で囲んだ部分が授業中で「リトルティーチャー」を活用する場面。練習問題を取り組ませる時、早く終わった生徒に他の生徒を支援するように促している

そして、3年生になったら、自分の理解度をしっかりと把握し、分からなくても安心して言える関係が出来れば良いとしている。

■全員黄色という問題も織り交ぜる

学力対策というと下位層を集めて補習を行うのが一般的だが、同校では生徒によって進度に大きな差が生まれるのを防ぐため、できる限り集団指導で下位層対策を行っている。犬童先生はその理由を次のように説明する。

「『みんなと同じ問題を解いた』という経験が、下位層の生徒の意欲を高めるためにも重要だと考えています。クラス全員が黄色の付せん紙になる課題をあえて出し、分からない問題をみんなで頑張っ解決しようとする場面も設けています」